

「ナイデ」と「ナクテ」の相違について

吉 永 尚

1. はじめに

本稿は、接続のテ形節の否定形態「ナイデ」「ナクテ」について、意味的・統語的観点から考察を加え、それぞれの文法的特徴から、「ナイデ」「ナクテ」の接続用法の相違点を明らかにする事を目的としている。

「ナイデ」「ナクテ」接続の先行研究は、殆どが主節に対する従属度に関する論考であったが、本稿では、「ナイデ」「ナクテ」節自体の句構造、及び接続文全体の文構造についても考察を試みたい。

吉永 (2012 a, b) では、接続機能を担う肯定テ形節が中核的な意味概念によって二つに分類でき、また、テ形節と主節の意味関係が統語構造と相互に関係し合っている事を述べた。

否定テ形節「ナイデ」「ナクテ」においても、この文法的特徴が同様に観察され、また、意味と統語が相互に関与し合っている事も併せて述べたいと思う。

2. テ形節の二分類

- (1) 太郎はカバンを抱えて走った。(付帯用法)
- (2) 次郎は書籍部に行って教科書を買った。(継起用法)
- (3) 花子は体調を崩して仕事を一カ月休んだ。(因果用法)
- (4) 雅子がピアノを弾いて明子が歌を歌った。(並列用法)

接続機能を持つ否定テ形節の考察に先立ち、まず、肯定テ形節の意味概念による二分類について述べたいと思う。

(1) - (4) のテ形は、いずれも様々な意味を持つテ形節の主動詞となるタイプであり、後続の主節とそれぞれの意味関係で繋がれているが、中核的な意味概念によって「付帯」「並列」は「並立タイプ」、「継起」「因果」は「先後タイプ」として括ることができる。以下、それぞれの分類の特徴について述べる。

2.1 「並立タイプ」と「先後タイプ」

「並立タイプ」

付帯は、テ形節事態が起こってほぼ同時（「座って」や「抱えて」では短い動作時間の先行があるが「笑って」などは同時）に主節事態が起こり、主節事態が続く間、テ形節事態と主節事態は並立する。主節事態が主要な意味内容を持ち、テ形節事態はその様態を説明するという主従関係はあっても、時間的・空間的に同存並立する。

並列では、テ形節事態と主節事態はそれぞれ独立し、主従関係はなく、また時間的先後関係も必要ないので前後節の入れ替えが出来る。前置されるテ形節内容が先に認知され、認知の先後関係はあるが、論理的統一テーマの範囲内であれば、事態の意味関係は自由であり、相互に独立して並立していると言える。

「先後タイプ」

継起と因果は、いずれも時間的先後関係が強い。時間的先後関係だけで解釈されるのが継起であり、それに加えて因果解釈されるのが因果である。従って、これらは連続関係にあり、「先後タイプ」として括ることができる。因果の意味が強くなる要素、つまり述語の性格や文脈などの存在によって、因果解釈に傾き、無い場合は継起解釈される。継起は時間的先後、因果は論理的先後を中核的意味としている。

認知した順に上下に並立して繋がっているのが並立タイプ、時間的論理的順序で線状に直列しているのが先後タイプと言えるであろう。そして、テ形接続の大部分は、いずれもこの2タイプに収束すると考えられ、テンス要素テの持つ、接続的性質及び時間的性質の二つの性質のうち、どちらがより顕著に表出しているかによって分類されると思われる。

接続的膠着性は並立タイプ、近い過去を表わす時間性は先後タイプにおいて顕著で、いずれのタイプもテの持つひとまとまりにして後に接続していく性質を利用して接続しているものと思われる。

そして、これらの意味タイプによる二分類は、否定テ形節「ナイデ」「ナクテ」においても同様に適用できると考える。なぜならば、否定辞「ナイ」を取り込んではいても、最終的にテによって節構造を構成し、テの持つ文法的機能によって、主節に膠着接続している点では基本的に一致しているからである。

以下、「ナイデ」「ナクテ」接続の例文を対比しつつ、その相違点について考察する。

3. 「ナイデ」と「ナクテ」の相違

先行研究では、一般に「ナイデ」は動作性の否定形、「ナクテ」は状態性の否定形とされている。当節では、これらの分布の相違を観察し、それぞれの接続機能における特徴について考察を加える。

3.1 「ナイデ」と「ナクテ」の選択制限

「ナイデ」「ナクテ」の述語による選択制限について、まず、動詞の「ナイデ」節、「ナクテ」節を各用法で観察する。

(5) 彼は電車の中で吊り革につかまらないで／*つかまらなくてしっかり立っていた。(付帯)^{注1)}

(6) 玄関のドアを閉めないで／*閉めなくて出て行った。(継起)

(7) 彼は全然停止線に気付かないで／気付かなくてパトカーに呼びとめられた。(因果)

(8) 待っていた雅子が来ないで／来なくてアキラが来た。(並列)

動作性の述語では、四用法共に「ナイデ」が使用され、「ナクテ」は付帯、継起で許容度は低い。

また、接続用法以外でも選択制限が見られ、「～ないで下さい」「～ないでほしい」は「～なくて下さい」「～なくてほしい」に変換できない。

次に、形容詞の「ナイデ」節、「ナクテ」節を見る。

(9) 強く*ないで／*なくてドアを叩く。(付帯)

(10) 朝は暑く*ないで／*なくて午後から暑くなった。(継起)

(11) このブドウは酸っぱく*ないで／なくて沢山食べられる。(因果)

(12) この動物は視力が良く*ないで／なくて嗅覚が鋭い。(並列)

(10) では、「朝は暑くなくて、午後から暑くなった。」が許容されるのは、「朝(は)～、午後～。」という対比的な並列として解釈される場合であり、純粋な継起では難しいと思われる。

形容詞で付帯・継起は無く、他の用法でも「ナイデ」節は全て許容されない。

以上をまとめると、形容詞など状態述語の場合、「ナイデ」は一切許容されず、また、「ナクテ」は付帯・継起以外では動作性・状態性述語共に許容度が高いので、「ナクテ」は、動作性述語のみ許容される「ナイデ」よりも、広い範囲で用いられる事がわかる。しかし、どちらも肯定形のテ形接続と比べると形態的な使用制限が強い。

益岡(1997)によると、「ナクテ」は状態性が強いが純粋に状態性と言えず、状態性を帯びる面があると言うにとどまるとしている。しかし、「ナクテ」は広義の形容詞の範疇に属し「ナイデ」は形容詞の範疇に属しないとし、本来、形容詞の範疇に属するテ形の否定形では、動詞性が要求される位置では有標の「ナイデ」が、そうでない場合は無標の「ナクテ」が用いられるとしている。

三枝(2006)によると、話し言葉は書き言葉に比べ状態性用言に接続するテ形節が多い傾向が見られると言う。また、話し言葉は「ナイデ」「ナクテ」という動詞の否定形、形容詞・名詞述語の否定形が多く、並列的な対比の意味合いが強いとし、話し手は会話の場で考えながら発話を続けるため、この様な用法が多くなるとして、以下の様な例を挙げている。

(13) ・・感想を、立ってじゃなくてね、もちろん座ってですよ。(p.22)

(14) ・・こういうねえ、品のいい甘さじゃなくて、ただ甘い！(p.22)

4. 「ナイデ」節と「ナクテ」節の意味と統語

吉永 (2012 a, b) では、テ形節は否定辞ナイを取り込むため、否定句節 NegP 上に位置する時制句節 TP(S) であると考え、並立・先後の二つのタイプについて意味と構造が相互に関与している事を述べた。

否定テ形節「ナイデ」「ナクテ」についても、同様に意味と構造の観点から考察する。

「ナイデ」節「ナクテ」節はどちらも NegP (否定節) を取り込んでおり、否定辞ナイの後にテが付加されているので、節自体の構造は四用法共に TP(S) と思われ、基本的に構造的な違いは無いと思われる。テについても肯定テ形節と同様、テンス要素と考えたい。

当節では、各用法の「ナイデ」節「ナクテ」節が、構造的にどの位置に配置されるかについて、意味と統語の関係から考察する。

吉永 (2012 a, b) では、テ形節の付帯、継起、因果は付加構造、並列は等位構造を取るとした。付加構造とした根拠は、いずれも副詞節的な機能を持つため、副詞節の一般的な構造位置として付加構造と考え、並列については、等位性を表わす種々のテスト結果により等位構造と判断した。

結論を先に述べると、否定形の場合もほぼ同様に考えられると判断する。「ナイデ」節の付帯・継起・因果、「ナクテ」節の因果はいずれも副詞節として機能し付加構造を取り、また、「ナイデ」節「ナクテ」節の並列も同様に等位構造を取ると思われる。肯定形のテ形接続と比べて、対比的な意味はやや強いと思われるが、前後節が対等に並立しているという意味では、等位構造を取ると判断できるからである。

それぞれの配置位置を観察するため、まず、動詞「ナイデ」節について、VP 位置より上か下かを、前節と同様に文末の否定作用域に収まるかどうかによって測定する。

例文は日常的には用いないと思われるものが含まれているが、否定辞の作用域を調べる目的上、敢えて提示し文末否定作用域を [] で示す。二重否定の解釈原理 (中右 (1994: 125)) によると、主節 (文末) 否定はモダリティ内否定、内部否定は命題内否定であると言う。

(15) うちの子は、まだ自転車に [補助輪を付けないで乗れ] ない。(付帯)

本稿では、[[補助輪を付けないで乗れ] ない] の様に、否定を含んだ命題全体が言い切りの文末否定によって丸ごと否定されると考える。付帯では概ね文末否定作用域に入り、VP 位置に付加されていると判断される。

(16) [封を切らないで手紙を読め] ない。(継起)

同様に否定を含んだ命題全体が言い切りの文末否定によって丸ごと否定されると考え、VP 付加と判断される。

因果では、文末否定作用域に入り VP 付加と思われるものは考えにくい。

(17) * 太郎は [時間が足りないで、全問解答でき] なかった。(因果)

次に、命題否定が独立し、文末否定によって丸ごと否定されない、つまり文末否定の作用域に入らず S 付加と思われるものを考える。

継起では S 付加と思われるものは少ないが、因果では許容度が上がり、不自然さが減少する。

(18) *前の車は一旦停止で止まらないで [次の赤信号で止まら] なかった。(継起) (「赤信号でも」の様な並列文では許容度が上がる。)

(19) ? 決議案は多数決が成立しないで [結局実現し] なかった。(因果)

次に、並列について見る。

(20) 結局、雅子は大阪に行かないで, [明子も東京に行か] なかった。(並列)

文末否定作用域に入る文は考えにくく、一般的に S 等位構造を取ると思われる。

否定テ形節も肯定テ形節と同じく中核的な意味概念により二つの意味タイプに分類される事については、第 2 節で既に述べた。

「ナイデ」節の四用法の構造位置を二つのタイプと考え合わせると、以下の様に考えられる。形容詞など状態性述語は無く動作性述語のみ許容される。

〈並立タイプ〉→付帯は VP 付加、並列は S 等位

〈先後タイプ〉→継起は VP 付加、因果は S 付加

両タイプの各構造をラベル付き括弧表示で表わす。(ナイデ節は「～ナイデ」で表わし、等位構造は接続要素 and を便宜的に入れる事とする。また、主節 VP 上の NegP は省略する。)

〈VP 付加構造〉[S[VP～ナイデ[VP···V]]]→並立・先後タイプ

〈S 付加構造〉[S～ナイデ[S[VP···V]]]→先後タイプ

〈S 等位構造〉[S[S～ナイデ]and[S[VP···V]]]→並立タイプ

前節で見たテ形節の統語構造と同様、両タイプで構造位置の高低が見られるが、時間と論理で付加位置の高低が相違する。主節動詞と緊密な時間的連続が強制される継起は一般的に高い位置に付加されず、論理的関係で繋がる因果は高い位置に付加され、ナイデ節の動作性の強さに起因すると思われる。

次に、「ナクテ」節の統語構造を観察したい。因果・並列では動作性・状態性述語共に用いられるが、付帯・継起では許容度が低い。動作性述語の場合には、形容詞的形態のために、元々動作性の強い付帯や継起では座りが悪いと考えられ、使用が制限されると思われる。また、状態性述語でも、テ形否定形の付帯や継起は考えにくい。付帯・継起は無いので因果の付加位置について、VP 位置より上か下かを文末の否定辞作用域に収まるかどうかによって観察する。同様に否定辞作用域を [] で示す。

(21) * [意味を辞書で確認しなくて恥をかか] ないようにしなさい。

(22) * きっと、[花子の事が好きでなくて仲間に入れ] ないのよ。

(23) 待ち合わせ時間にまだ一人来ていなくて [出発でき] ない。

(24) このブドウは美味しくなくて [沢山は食べられ] ない。

(21) (22) は、それぞれ動作性、状態性述語であるが、共に文末の否定辞作用域内と考えにく

く、(23) (24) では、動作性、状態性述語共に文末の否定辞作用域に収まらず、ナクテ節が独立した否定作用域を有し、S 付加と思われる。

次に、並列についても同様に見る。

(25) アキラは朝食を食べなくてヒトシは [夕食を食べ] ない。

(26) 雅子は魚が好きではなくて明子は [野菜が好きでは] ない。

(25) は動作性、(26) は状態性であるが、共に文末の否定辞作用域に入らず、S 等位構造を取ると判断する。

「ナクテ」節の四用法の構造位置を二つのタイプと考え合わせる。動作性・状態性述語共にはほぼ同様の振る舞い方を見せる点で、「ナイデ」節と大きく相違する。

〈並立タイプ〉→付帯無し、並列は S 等位

〈先後タイプ〉→継起無し、因果は S 付加

テ形節、「ナイデ」節と異なり、「ナクテ」節では両タイプで用法が論理的関係のもの片方だけに限定され、共に高い位置に配置されると考えられる。

次に、両タイプの各構造をラベル付き括弧表示で表わす。(ナクテ節は「～ナクテ」で表わし、等位構造は接続要素 and を便宜的に入れる事とする。また、主節 VP 上の NegP 及び形容詞節の構造は省略する。)

〈VP 付加構造〉[S[VP～ナクテ[VP···V]]]→無し

〈S 付加構造〉[S～ナクテ[S[VP···V]]]→先後タイプ (因果のみ)

〈S 等位構造〉[S[S～ナクテ]and[S[VP···V]]]→並立タイプ (並列のみ)

動作性が強く単純な時間的並立・先後関係で低い付加位置を取る付帯・継起は動作性・状態性述語共に選択されない。また、因果・並列など、論理的関係を表わし、高い付加位置を取るものでは、動作性、状態性述語共に用いられる事がわかる。

「ナクテ」節は、形容詞的形態によってテのテンス性が弱化し、時間関係よりも、より論理的並立、論理的先後に適応した形態であると考えられ、否定テ形節は、ナイという状態性要素を含むため、より形容詞性の強い形態である「ナクテ」が、状態性述語専用形態として定着したと思われる。

並立タイプでは並列のみ、先後タイプでは因果のみという分布が示す様に時間関係よりも論理関係で繋がり、高い構造位置に配置され状態的事態を中心に接続するという機能が発達したと推測する。

反対に、「ナイデ」節では、状態性述語は許容されず、動作性述語でも付帯・継起は VP 位置のみに付加され低い構造位置を取り、時間的緊密性が必要とされる単純な意味関係の接続機能を中心に発達したと推測される。

加藤 (1996) では、否定のテ形節では「ナクテ」は使用頻度が高く従属度が低く、逆に「ナイデ」は使用頻度が低く従属度が高いとし、テ形動詞の性質と関連していると結論付けており、両者の特徴を端的に示している。

吉永 (2012 a, b) では、肯定テ形節の並立・先後タイプを、動作性が強く時間的關係が強いものと状態性が強く論理的關係が強いものに分け、時間的緊密性が強いものは低い構造位置に、論理的關係が強いものは高い構造位置に配置される事を結論付けた。「ナイデ」節は前者に適應し、「ナクテ」節は後者に適應した形式であると考えられる。否定テ形節においても、やはり、意味と統語は相互に關係し合っていると言う事が出来るであろう。

5. 結語にかえて

「ナイデ」と「ナクテ」の意味的統語的相違を調べた結果、テ形接続の場合と同様に、前後關係の意味の単純さや複雑さ、時間的性質の強さや論理的性質の強さが構造位置の上下に関わっている事がわかった。

テの持つテンス要素としての時間的性質や膠着的性質が意味タイプと構造に関わっており、単純な時間關係、緊密性を持つテで繋がるものは低い位置に、時間性に加え論理性も担うテで繋がるものは高い位置に配置されると思われる。

肯定形と同様、「ナイデ」「ナクテ」という否定形テ形節の文法的振る舞いにも、やはり文の意味と統語の關係性が明確に表れており、陳述性の高低と句構造の大小の相互関与を裏付けている。

注

注1) 以下、全て「用法」を省略し、「付帯用法」は「付帯」というように表記する。

参考文献

- Bloch, Bernard (1946) "Studies in Colloquial Japanese Part 1, Inflection," *Journals of the American Oriental Society* 66, [[活用] 林栄一監訳『ブロック日本語論考』(1975) 研究社].
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*. Cambridge, MA.: MIT Press.
- 長谷川信子 (編) (2007) 『日本語の主文現象：統語構造とモダリティ』 ひつじ書房.
- Hasegawa, Yoko (1996) *A Study of Japanese Clause Linkage*. Tokyo: Kurocio Publishers.
- 日高水穂 (1995) 「ナイデとナクテとズニーテ形の用法を持つ動詞の否定形式－」 宮島達夫・仁田義雄 (編) 『日本語類義表現の文法 (下) 複文・連文編』 pp.471-480, くろしお出版.
- Hooper, Joan B. (1975) "On Assertive Predicates," J. imball (ed.) *Syntax and Semantics* 4, pp.91-124, New York: Academic Press.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房.
- 加藤陽子 (1996) 「「ナクテ」と「ナイデ」の差異について」 *Working Papers Vol.7*, pp.17-27, International University of Japan.
- 國廣哲彌 (1982) 「(テンス・アスペクト) 日本語・英語」 森岡健二・宮地裕・寺村秀夫・川端善明 (編) 『講座日本語 11: 外国語との対照Ⅱ』, pp.2-18, 明治書院.
- 久野暲 (1983) 『新日本文法研究』 大修館書店.
- Li, Ya-fei (1990) "On V-V Compounds in Chinese," *Natural Language & Linguistic Theory* 8, pp.177-207.
- 益岡隆志 (1997) 『複文』 くろしお出版.
- 三原健一 (2011 a) 「活用形と句構造」 『日本語文法』 11 卷 1 号, pp.71-87.

- 三原健一 (2011 b) 「テ形節の意味類型」『日本語・日本文化研究』第 21 号, pp.1-12, 大阪大学大学院言語文化研究科言語社会専攻海外連携特別コース.
- 南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』大修館書店.
- Nakatani, Kentaro (2004) *Predicate Concatenation: A Study of the V-te-V Predicate in Japanese*. Ph. D. Dissertation, Harvard University.
- 中右実 『認知意味論の原理』大修館書店.
- Nikolaeva, Irina (ed.) (2007) *Finiteness*. New York: Oxford University Press.
- 仁田義雄 (1995) 「シテ接続をめぐって」仁田義雄 (編) 『複文の研究 (上)』, pp.87-126, くろしお出版.
- 仁田義雄 (2010) 『日本語文法の記述的研究を求めて』ひつじ書房.
- Rizzi, Luigi (1997) "The Fine Structure of the Left Periphery," In Liliane Haegeman (ed.) *Elements of Grammar*, pp.281-337, Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Ross, John Robert (1967) *Constraints on Variables in Syntax*. Ph. D. dissertation, MIT. [Published (1986) *Infinite Syntax*. Norwood, NJ: Ablex Publishing Corporation.]
- 三枝令子 (2006) 「話し言葉における「テ形」」『一橋大学留学生センター紀要』9, pp.15-26.
- 田川拓海 (2009) 『分散形態論による動詞の活用と語形成の研究』筑波大学博士論文.
- 坪井美樹 (2001) 『日本語活用体系の変遷』笠間書院.
- 内丸裕佳子 (2006) 『形態と統語構造との相関 - テ形節の統語構造を中心に -』筑波大学博士論文.
- Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in Philosophy*. Ithaca: Cornell University Press.
- 吉永尚 (2012 a) 「テ形節における統語的考察」『園田学園女子大学論文集』第 46 号, pp.113-123.
- 吉永尚 (2012 b) 「テ形節の意味と統語」三原健一・仁田義雄編 『活用論の前線』, pp.79-114, くろしお出版.
- Yuasa, Etsuyo and Jerry M. Sadock (2002) "Pseudo-Subordination: A Mismatch between Syntax and Semantics," *Journal of Linguistics* Vol.38, No.1, pp.87-111.

[よしなが なお 日本語教育・言語学]